

博物館だより

No.12

平成19年4月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
 福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
 TEL 0930-33-4666
 FAX 0930-33-4667

歴史民俗博物館 友の会会員募集!

みやこ町歴史民俗博物館友の会は「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに講演会やバスハイク、史跡巡りなどさまざまな行事を行っています。「楽習」意欲のある方であればどなたでもお気軽に参加いただけますので、ぜひご入会下さい。

■入会の方法

博物館の窓口で会費を納めてください。博物館の窓口まで来るのが難しい方はご一報を!

■年会費

- ・個人会員 3000円
- ・家族会員 1名につき

2000円

■備考

・町外の方もご入会いただけます。

■お問合せ

博物館内友の会事務局

☎33・4666

* * * * *

お知らせ

4月の歴史講座

【漢詩文講座】

4月5日(木) 9時30分～

【古典かな講座】

4月12日(木) 9時30分～

【古文書講座】

4月14日(土) 10時00分～

【みやこ学講座】

4月15日(日) 10時00分～

【初級古文書講座】

4月27日(金) 10時00分～



▲博物館運営委員会

2月25日(日)、「第1回みやこ町三重塔まつり」が行なわれ、博物館友の会からも「焼き芋」の出店をし、ご好評をいただきました。

2月26日(月)、第1回博物館運営委員会開催。識者や学校の先生方に、博物館運営に対する貴重なご意見をいただきました。



▲寒さも手伝って焼き芋は好評!



▲幕末期の名工・辻五兵衛の墓前にて

3月18日(日)、本年度2回目となる博物館友の会「歴史たんけんウォーク」を実施。前福岡県文化財保護指導委員の橋本幸作さんを講師に迎え、多様な石の文化の遺跡がみられる行橋市沓尾を散策しました。海の聖地・姥ヶ懐(うばがふところ)や石工として名高い辻氏歴代の墓地などを訪ねましたが、好天にも恵まれ、絶好のウォークとなりました。



▲豊前海沿岸随一の聖地「姥ヶ懐」

《古文書解読コーナー》

① 為田

② (ヒント) ↓ 良田

③ 株主

(ヒント) 「〇〇株主」

④ 昭和

(ヒント) 「給与〇〇」

⑤ (ヒント) 来年

(ヒント) 一つ一つ。次第に。

◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 田為
- ② 田良
- ③ 主株
- ④ 昭和
- ⑤ 来年

知ってるつもりでのヒト・モノ・コトに意外なドラマが…

みやこの歴史発見伝 1

生立八幡宮の『しばり龍』

「しばり龍」の伝説

犀川総鎮守として知られる生立八幡宮の拝殿に、一体の龍の彫物が据えられています。不思議なことに鎖が掛け渡されていて、何やらいわくありげな雰囲気がかかっているのですが、この彫物には次のような言伝えが残されています。

昔むかしのこと、犀川末江の妙見様のお社（現太祖神社）が作られたとき、村人たちは「よそんがたにやねえ立派なお宮にしようや」と話し合い、竹田番匠という天下の名工を呼んで社を作ってもらった。番匠は見事な社を造り、仕上げに本殿の欄間に立派な龍の彫物を刻んで帰っていった。

社の普請は近在でも評判となり村人の自慢となったが、あるときから不思議なことが起こり始めた。雨でもないのに夜になるとお宮の近くに黒雲が湧き、割れんばかりの雷鳴がとどろいて嵐のような風が一晩中吹きあれ、そばの池に大波が立つ、というもの。

それでも夜が明けるとからりと

晴れて何事もなかったかのように

なるため、村人たちもやがて気に掛けなくなった。ところが、ある時一人の村人が朝の仕事前にお参りをしようとしてお宮に来てびっくり、雨など降ってこないのに本殿の前が水びたしで、特に龍の彫物からは雫が幾筋も滴りおちていた。

「名人の彫もんにや魂がこもるちゅうが、こりやひよつとしちから、龍の奴が動き出えち、池ん中で水浴びどましょつそじゃなかるうか：」そう考えた村人が村へ戻ってそのことを話すと瞬く間にうわさが広がり、そのうち「わしも龍が暴れよつその見たけの！」と言う村人が次々に出てきて、彫物の龍が生きているということとなった。そのうち龍は昼間にも暴れるようになり、池で水浴びをしていた子どもが危うく溺れ死

につけたという事件も起こった。困った村人は生立社の大宮司さんに相談することとし、事情を話

したところ大宮司さんは「それなら、その彫物は私のお宮で預かってご祈禱をしてあげよう。だが、末江のお宮に自慢の龍の彫物がな



▲拝殿正面に今も縛られる龍の彫物

の日に抱えてあった鎖で龍の彫物を縛り上げた。するとその日から龍が暴れ出るとはびたりとやみ、村は平穏を取り戻した、というものです。

伝説が物語るもの

なかなかユニークな伝説ですが、この伝説はいくつかの背景があつて出来上がっているようです。

まず龍の彫物ですが、形状からみてもともと太祖神社にあったものとは考えにくく、本来は生立社の社殿を装飾していたものと考えられます。それが改築の際に取り外されはしたものの見事なものだけに篇額に収めて絵馬として掲げられたというところではないかと考えられます。

太祖神社との繋がりが語られた要因は恐らくは彫物に施された彩色にあると考えられ、太祖神社の

だが、入れ替わりに大変になったのは生立社の方で、十日もすると再び龍が暴れだすようになり、今度はお宮の池や前の大川で水浴びをするようになった。大川には大橋へ荷を送る船も行き交つており、人々の困りようは尋常でなく「何とか龍の暴れんごとしちおくれんじやるか」という声が増しに大きくなった。意を決した大宮司さんは鎖を抱えて七日間のお籠りをし、お籠り



▲生立社のもので交換したとされる太祖神社の龍

社殿は神社には珍しい白の胡粉地に岩絵具による彩色がなされています。こうした社殿は犀川地域では太祖神社のみであり、そのことが生立社の龍と交換したという伝説を生んだと考えられます。

ちなみにこの龍が彫られた時期は、他の神社彫刻の類例などから17世紀頃と見られ、ちょうどこれに近い寛文十（一六七〇）年に、生立社の社殿建立の記録があるため、この龍はこのときの造営の産物である可能性があります。当時は日光東照宮造営（一六三五年前後）から三十年以上を経て、各地でこの際の技術が普及して技巧を凝らした建物が盛んに作られており、当時の生立社がそうしたブームの中で造営された可能性があります。

そうなる社殿を飾る見事な彫物に對してこうした伝説が語られるのも自然なことといえます（二説にこの龍は左甚五郎の作とも伝えられています）。

いささか推測が過ぎた感もありますが、伝説を歴史的に検討してみただけ、伝説成立の背景にはこうしたことがあると考えることもできるのです。なお、しばり龍にかぎらず彫物の動物（龍だけでなく虎・猿・鹿など）が動き出して暴れるといった話は各地の名建築に伝わっており、この龍もその例に違わぬ「名作」であることは間違いないようです。（木村達美）